

野口英世と石塚三郎

—漢詩文による交遊をめぐって—

澁澤 尚

緒言

「はやくきてくたされ。はやくきてくたされ。はやくきてくたされ。はやくきてくたされ。いしよ「一生」のたのみて。ありまする。(中略)いつくるトおせて「教えて」くたされ。これのへんちち^マ「返事」まちてをりまする。ねてもねむられません」。これは明治四十五年一月二十三日付、「大日本福島縣耶麻郡翁島村三ツ和局區内 野口シカ〔稿者註…差出人部分代筆〕」として、当時アメリカのニューヨークはロックフェラー医学研究所に遊学中であつた野口英世に出された、母シカ自筆による現存唯一の手紙の一節である。かつての便りに「愚母よりなづかしき手紙参り申候、總文假名なれ共充分了讀仕り親の愛に咽び申候、小子ハ誰れが愚母の代筆せしか推察しかね申候、或は愚母が自ら書いたとすれば小子は只管驚くの外無之候、小子は今日まで愚母が書き得ることを知らざりし事ニ御座候」(明治三十六年四月十三日付)と驚喜していた英世であつたが、久々の直筆に「昨夜城母〔稿者註…生地三城潟の母シカの意〕より來翰、一讀し故郷の實情眼前ニ映し啼泣の極ニ感じ申候、小子の不孝を顧み愧死の思ひ致候」と慚愧流涕し、「來年の六月中には必ず歸省仕べく候」(以上四十五年二月二十二日付)と恩師小林栄宛書翰に明記したのであつた。¹⁾しかし、母の「早く来てくたされ」との切なる反覆にもかかわらず、研究の多忙と例の

手元不如意を言いわけにして、大正改元の早々に帰朝することはついになかつた。まさに、「彼の試験管には、どの細菌も悦んで發育したが、彼の財布には、どの國の金錢も決して滞在することを承知しなかつた」(奥村鶴吉『野口英世』、以下奥村『野口』と略称²⁾)のであり、「學事上には大成功なるも經濟上には實に零點以下に有之申候」(四十年七月三十一日付血脇守之助宛)などと悶々と自歎する英世の姿がここにもあつた。³⁾

明治三十三年の師走、某女との婚約を条件に得た留学旅費を一晚の横浜遊興で使い果たしてしまつた英世は、当時東京齒科医学院院長であつた血脇守之助が高利貸しからの借金で賄つた大金でようやく渡米した。到着後早々、来日時に通訳しただけの縁であつたサイモン・フレクスナー博士を、「背水の陣といふよりは、彈丸の御使ひといつた方が適切」(高田義一郎「野口英世博士の心境」⁴⁾)との態で強引に頼り、まずは費府、すなわちフィラデルフィアのペンシルバニア大学に身を寄せ米国における研究を開始させるのであるが、最終的には西アフリカのアクラ(現ガーナ共和国首都)において研究中の黄熱病罹患により殉職する昭和三年五月にいたるまで、たつた一度だけ帰國を果たしていることは周知であろう。それは渡米から実に十五年ぶり、大正四年秋のことであつた。

常に狂人的な研学と金錢的な悪癖とから抜け出せないはずの英世

が、にわかに帰国を決意した契機とは何であったのか。あまたの伝記類は、それが憔悴した母シカを接写した生々しい写真であったことを明示している。このシカ像を撮影して、それを錦衣婦郷の催促を強くしたためた書翰とともに英世に送った人物こそが、英世の青年期以降第一の盟友たる石塚三郎であった。

小論では、この優秀な歯科医であり後に衆議院議員も務めた石塚三郎と医師であり世界的な細菌学者として名声を轟かせた野口英世との交遊について、遺された多くの書翰、また師友との伝記や回想録等を通し、従来論及されることがほぼ皆無であった文学的な側面から、特に若年期の漢詩文や帰国直前になされた漢詩唱酬に焦点をあてつつ考察してみたい。

一 上京前の野口英世と漢詩文

当然ながら等閑視されてきた英世の漢詩文については、渡米前に詠まれた七絶風漢詩の解釈、及び愛用の雅号「湖柳生」の意外な由来とともに拙稿において論じたことがある。⁽⁵⁾ その緒言では、大正四年、凱旋帰朝時揮毫の扁額「有盈必缺」を取り上げ、「忍耐」や「美酒佳肴」といった垢抜けない文句を書き連ねたばかりではない英世の漢才についても少しく言及した。そもそも貧農に生い立った英世の漢詩文の才能は、例えば同じ明治大正期の文豪で軍医でもあった森鷗外のように、幼少から津和野藩御典医の嫡男として本格的な漢籍に目を曝すといった水準には相違し、到底一流とはいえないものなのであるが、それでも明治人として、その知識はいったい何処に発源するのであろうか。ここでは若年期における英世と漢詩文との関係について、遺された書翰や伝記的な事蹟をひもときつつ明らかにする。

明治九年十一月九日、福島県耶麻郡翁島村大字三ツ和字三城瀉(現猪苗代町)に、父佐代助、母シカの長男として生を享けた英世は、初め清作と名づけられた。後年、英世が恩師小林栄の人望を鑽仰して贈った書に「磐峯猪水鍾秀靈」(磐峯猪水、秀靈を鍾む^{あつ})とあるように、北には山体崩潰前の会津富士磐梯山が聳え、南には渺々たる猪苗代の湖水が遠く広がる、目には山水秀麗の景勝地であるが、農業への天恵にはいたって乏しく、そこは「積もるに早く、融くるに遅い雪の名所で、耕作も、南方の如く思ふにまかせず、其他は、湖上に漁る外、生計の道を知らぬ所」(奥村『野口』)として、田畑はおおむね荒蕪という典型的な寒村であったようである。さらに、婿養子に迎えた佐代助は終日酩酊して一向に家業を顧みず、シカの父清太郎は常に不在、母ミサは無為徒食ときているから、野口家は破屋で貧苦に喘ぐなかひとりシカ一身が背負っていたことになる。

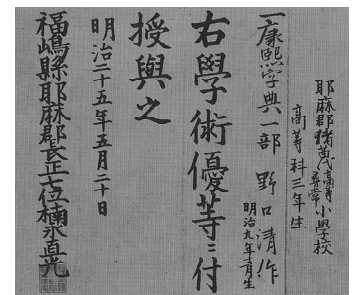
英世が数え三つするとき、あの大惨事が起こる。囲炉裏の火中に転落し左手足に大火傷を負うのである。幸い命に別状はなかったが、「左手の手首から先は、赤黒く爛れて、五本の指の内、拇指は腕首の脈處に、中指は掌に、皆一つに癒着して、手先は摺古木^{すりこぎ}のやうになつて了つた」(奥村『野口』)のである。当の本人も我が子に障碍を負わせた母も、貧窮に差別さえ加わって長く悲嘆に沈むことになるのであるが、「春秋の筆法でゆけば、大火傷が世界人類に大なる福祉を齎らした」(藤島太麻男「上京前後の野口博士」⁽⁷⁾)ともいえ、また、「天の恵の愛の鞭 無形の鞭に三歳の子の手熱火に爛れたる 不具の憾は金剛の意志を磨ける無價の玉」(土井晩翠『野口英世頌』⁽⁸⁾)と詠われるように、皮肉なことこの災禍こそが剛毅不屈の精神をもって英世を医道に導き、世界的な学者として雄飛する端緒ともなったのであった。

明治十六年四月、英世は旧会津藩の郷倉を改装した三ツ和小学校

(翁島小学校として令和六年閉校)の初等科六級に入学した。この頃、通学のかたわら近隣駐在所の巡查や長照寺の和尚について漢文や英語の初歩についたようであるが、もとより漢学塾のような本式のものではなかったであろう。英世が諸々の学問で頭角を顕すのは尋常科から温習科に互る明治二十年前後からであり、級長と代理教員たる「生長」とを務めるまでになっていた。二十一年、尋常科四年修了の際には成績優秀につき福島県庁から褒賞を受けている。温習科の修了、すなわち尋常小学校の卒業試験は内輪で形式的に済ませるような安易なものではなく、なかなか厳格であったようである。二十二年の試験の際には、上級の猪苗代高等小学校の首席訓導小林栄が耶麻郡視学赤植清とともに試問したのであるが、これが英世と生涯の大恩師かつ常に「父上様」と呼ぶこととなる栄との初めての邂逅となった。

「その頃の試験は、第一試場、第二試場とあつて、第一試場は一人づつ、讀方、修身を試みる。第二試場は算術、作文、習字といふやうに大勢一緒に試みるのだ。數日同じやうな事をして幾らか倦んで居つた。しかるに今日前にあらはれた子供は、體の小振りな、身に襪褌を纏ひ、繩縫れの帯をして、正面に立つた。色白く、目のぴんとして丸顔で、左の手が火傷か何かで倚形の手である事が目についた。それからして、本を讀み、修身の話をきいたが、言語明瞭、よくその意味も説いた事が他の子供と大分にちがつて居つた」(小林栄『野口英世の思出』、以下小林『思出』と略称)とは栄本人の言である。進路に逡巡していた英世は栄の慫慂に従い、そのまま往復三里の猪苗代高等小学校へ進学したのであった。

そこは近隣町村唯一の高等尋常小学校であり、当世風な硝子張りからギヤマン学校の異名があったというが、外観だけではなくその教師陣も充実していた。なかでも校長の武藤愛治は御用儒者であった中村



学術優等證書(明治25年)

正直、号敬宇の同人社に学んだ逸材で、漢文と英語とを得意にしていた。英世は何より理科を好み、また語学や作文も傑出していたが、当時多くの少年を悩ませていた漢文にもいたって熱心であったようである。校長が補習として新しい読本をもつて漢文を教授することになったとき、英世はその深井鑑一郎(福島師範学校教諭)が編纂した金三円の『標註漢文教科書』全四巻を容易に購えず、素封家の級友八子弥寿平に懇願、その父から借金して授業に臨んでいる。¹⁰⁾ 栄は「稿者補…英世に」漢文の素養はない筈だと思つて居つた(小林『思出』)ようであるが、武藤校長の薰陶よろしきを得て、相応の力はあるように思われる。明治二十五年には、耶麻郡長から「右學術優等二付授與之」として賞品の『康熙字典』一書とともに表彰されている。

二十六年、数え十八となった英世は抜群の成績をもって高等小学校を卒業した。武藤校長の強い推薦により、翌「明治二十七年三月二日付在學中ノ成績優等ニ付本縣廳ヨリ賞與下賜」を受けている。これに先だつ二十五年秋、栄を中心に教職員と同級生との醸金十五円により、英世の癒着した左手乖離の手術が、カリフォルニア大学医学部に学び、赫々たる外科の大家として会津若松に開院していたドクトル渡部鼎によつておこなわれていた。この成功は英世の医師志望のきつかけとなるものであり、卒業後の四年近くを渡部開業の会陽医院の書生として医学の基礎を学ぶことにつながるのである。

「小子儀も療治も仕り候事故、録々として小成に安んせざる見込に御座候、然れども家に資なきハ又以て如何ともなし難し、依て他の手

段なし、(中略)有力者即ち慈善家の得トクに依て赤心を以て資本をかり以て徒らに友人先生の恩を空うせざらん事をのぞむものなり、必ず天下の稻蟲たるを厭イヤう所なり」(明治二十六年付月日不明坂誠宛)とは、おそらく冒頭「最早今年は卒業に相成る事故」と記すので、猪苗代小学校卒業直前の暗澹たる心境の吐露であろう。英世はここでも助言を仰ぐべく、猪苗代町字古城に住まう恩師を訪ね、「醫者の仁術なる事を深く體驗した彼」英世に、榮は医師たらんとする道を指し示し、学費と時間とがかからない「近道をいグくには、前期即ち學科、後期實地、二つの試験」を受けるのがよく、その修行のためには「お前が世話になつた渡部先生の所の藥局生になるがよからう」(以上小林『思出』)と具体的に指導するのであった。

かくして明治二十六年五月、会陽医院に入門、医道のかたわら英語、仏語、独語を能く修め、原書を容易に読破するまでになつていった。英世が寄宿していた医院の二階では「終日終夜讀誦の聲が絶えない」(奥村『野口』)との証言もあり、それはナポレオンばりの短時間睡眠による猛勉強の賜物でもあろうが、幼少期から語学の才にとみに長けていた英世当然のなせる技でもあった。⁽¹¹⁾なお、英世は後年、「漢文の素読が外国語修得の秘訣である」(黒田収「野口英世」)と周囲の者に話していたそうである。

ある日のこと、渡部家の倉庫は洋書のみならず和漢書の汗牛充棟ただならぬことを知り得、「荒野から寶玉でも探し出した時のやうに、愕きと喜びを以つて」(奥村『野口』)、暇を盗んでは忍びこみ漢方医学書や詩律、多くの漢書を涉獵した。そもそもドクトル渡部鼎の父は、渡部思斎という一廉の漢方医、また儒學者として知られる人物であった。⁽¹²⁾

かつての西会津町立野沢小学校(平成二十四年閉校)の校庭には、

一基の大ぶりの顕彰碑(大正十二年除幕)が建っていた。題額に『論語』述而篇からの「誨人不倦」が大書され「渡部君思齋碑銘」と続く。思斎は「諱爲助、字昔芳、思齋其號、河沼郡野澤村人」であり、慶応三年に「會津藩召爲醫學寮學監、固辭不出、聚徒教授儒醫兼、聲譽隆然起」と記されるので、會津藩が日新館の医学長に召し抱えんとするも固辞して出仕せず、学徒を聚合させ儒学や医学を教授、その名声は日増しに高まつていたようである。この私塾は『周易』繫辭傳上「聖人之所以極深而研幾也」から「研幾堂」と名づけられ、片田舎の寒村にありながら許多の人材を輩出した。研幾堂は学制改革により「明治六年邑建明晉學校、乃爲之校長、四方來學者益衆」と、明晋小学校(野沢小学校の前身)に引き継がれ、思斎はその初代校長として声望を一身に集めた。碑文は「諄諄善誘、盛徳達材者、不可勝數宜矣」とまとめられるが、これは顕彰碑文につきものの美辭麗句ではなく、実際に思斎のもとからは優秀な人材が巣立っていたのである。

例えば、新島襄の妻八重の実兄で、のち京都府議會議長として活躍した旧会津藩士山本覚馬が京都薩摩藩邸に幽閉された際、有名な建白書『管見』を覚馬の失明ゆえに口述筆記したのが研幾堂出身の野沢鶏一である。野沢は大赦による釈放後、覚馬の援助で大阪開成所や修文館に学び、英學者で政治家の星亨との交流を深めた。星編纂の『海外萬國偉績叢傳』(明治五年)や『英國法律全書』(明治六年)には、野沢の協力が大きかったといわれる。エール大学で法律を学んだのちは、法律家、弁護士として義兄となつた星を公私に互り支えた。なお、従兄にあたる石川映作も研幾堂出身であり、明治十二年に創刊された田口卯吉『東京經濟雜誌』の社説起草のかたわら、明治十五年、アドム・スミス『富國論』(The Wealth of Nations)の本邦初全訳といわれる『富國論』の出版に着手している。⁽¹³⁾

小林栄に続く英世二番目の恩師ドクトル渡部鼎は、思斎の長男として安政五年に陸奥国河沼郡野沢原町村（現福島県耶麻郡西会津町）に生まれている。「詩は日課として、毎日一律を賦するのを例とした」（奥村『野口』）という父から漢学の手ほどきを受け、明治五年、野沢雞一を頼りに上京し藍謝堂（高島英学校）で洋学、大学南校で英学を学び、七年に東京医学校に入学して医学を修めた。陸軍医として西南戦争に従軍、のちに日清日露の両戦にも出征している。明治三十五年には立憲政友会から衆議院議員選挙に立候補し当選、厚生や衛生の分野に取り組んだが、そうした関心は、すでに明治十八年、石川暎作とともに日本醫を廢する婦人束髮会を設立し、『束髮案内』（女学雜誌社）なる小冊子を編んでいることから知られよう。二十年、カリフォルニア大学に留学、翌年にはサンフランシスコで開業さえしている。二十三年、思斎の死を契機に帰国し会津若松大町に開業したのが、その三年後に英世が入門することになる会陽医院なのである。

前述したように、栄は当初英世の漢文の素養にだいぶ不審を抱いていたようであるが、「『稿者補』後年の」手紙の文なり額面等を書いた文字でもなか／＼漢文の味ひのあることは、御覽の通りであつた。これもこの時代に渡部先生のうちには澤山の漢籍があつたから、それを獨學したのであらう」（小林『思出』）と回想しており、また、漢学塾に通い始めた親友に触発され、英世が渡部家書庫に和漢の古書をあさる姿を描写した伝記も、「清作が後年、文章に堪能であつたのも、幾分此頃の勉強に胚胎してゐる」（奥村『野口』）ように記す。しかし、その実作となると残された資料はきわめて乏しく、いかながなものであつたらうか。

上京直前、会陽医院から栄に宛てた書翰（明治二十九年七月二十日付）の掉尾に次のように記されている。

昨夜深更就床睡不成、俯仰感慨不知遺處、兀毫結得一篇情

述懐 無韻 野口快眼兒

無韻

街頭狗送款老猫

巧言令色佔主寵

咄咄男兒有所期

豈須爭狡兒假腸

正邪甄拔在天道

一評任得惟君思聽

朶雲淡烟故情濃

魂魄長遊磐岳頂

この時すでにドクトル渡部は二年に互る出征を終えて帰国していたのであるが、諸先輩を差し置いて留守中の医院一切の用務から一家の会計までも与っていた英世への風当たりは強く、就中、本宅側と愛妾の住まう病院側との対峙に巻きこまれて苦境に陥っていた。これは、「家情不穩にして小生も不遠放逐せらるる運命と相成かも不知候、（中略）奥様は今度愈々離縁となり妾の入家と相成申候、（中略）妾は圖にのりて愈々高慢を働き、（中略）小生を無情に失敬に當り散らし、何とかして小生を忿怒し、其の過失によりて放逐せんとすの畫計實に奇怪千萬也、（中略）嗚呼、英雄「稿者註・渡部鼎のこと」も色の爲に身を誤る、可驚哉」（六月四日付）、「可恐毒婦「稿者註・愛妾のこと」の爲めに子弟間益々疎ならんとし、情實到底相通じ難く相成候、（中略）小生の冤は他日雪ぐ可く候、實なくいぢめらる、事ハ口惜敷候」（七月一日付）などと続けざま栄に窮状を訴えては幾重にも自制を促されていた頃の詩文であるから、怏々たる感情の溢出に任せた韻律も整

わなない愚痴に終始している。

残念ながら英世の会陽医院時代の漢詩文は右掲以外正式には知られていないが、「ある時は、雄心勃勃、自ら激勵する詩文を賦することもあつた」(奥村『野口』)として次の詩が記録されている。

孤城欲拔力不足 蒼茫吞淚茲有年
奮起投足君勿撓 奮然蹶起眠美人

「この詩文は當時の吉田喜一郎氏「稿者註…会陽医院時代の同窓、のち海軍医」が、数十年後の臆氣な記憶を辿つて記したもの」とはいえ、平仄はおろか押韻すら整つておらず、「その詩意に於ても、明確を缺いたほんの少年時代の、即興即吟の拙いもの」(以上奥村『野口』)である。

まとまつた日記や手記の類を遺さなかつた英世の事蹟を知るにあつて重要な一次資料は、多くの書翰であり、なかでも小林栄宛が詳細な近況報告を兼ねて最も貴重である。漢詩文の実作はともかく、会陽医院時代の英世が一時漢文調にかぶれた様子は、その報告内容に差があるとはいえ、恩師宛書翰における文体の極端な差違から多少なりともうかがわれるので、参考までに次掲しておこう。

【明治二十六年十二月二十二日小林栄宛】

(前略) 且つ昨日は關醫者の息子ヨリ態々の御まねぎにあづかりました、學術は概して進みました、化學の無機上篇がほしくありますが、鈴木駒吉様に依頼いたしました、第四リードルハ終りまりましたが、此後には第五に移りたくありますが、猪苗代小學校よりかりたくあります(後略)

【明治二十七年一月三十一日小林栄宛】

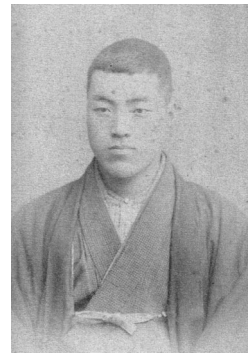
(前略) 吁嗟悲ヒカナ世ヲ此ノ境ニ終ハルノ君、多才ナル腦、雄識ナル漿、流暢タル靈、清峻ナル魂、飄トシテソレ竭シ逸トシテ是レ散ズ、北風凜トシテ孤松凋色アリ、嚴寒南壚ニ嘯キテ孤松凋色アリ、湟濠玻璃面ヲ張りテ鶯鴛時ヲ失ヒ、嗟峨タル磐梯岳、白髮銀頭噴烟遙ニ、鶴城ノ無辜ヲ弔フ謂カノ如シ、會陽古城汝ノ齡、幾百秋鴻儒碩學雄才豪傑士輩出シテ天下ヲ蹂躪シ、六合ニ雄視シタルハ維新ノ以前、一聲高ク天下ヲ石筵ノ敗報達スルヤ(後略)

ところで、この頃から英世は、「湖柳生」という雅号を用いるようになったと思われる。管見の限りでは、明治二十八年三月二十三日付坂誠宛書翰の封書裏署名「北會津郡若松町大町四十三番地 會陽醫院内湖柳生」が最初期の使用例である。かつて拙稿で論じた通り、「湖柳」とは湖畔になびく楊柳の意であり、一見したところ風流な雅語であるが、猪苗代湖にも多く叢生する水楊(学名 *Salix gilgiana*) は漢語で「蒲柳」(『爾雅』釋木) といい、その低木で脆弱な姿から「蒲柳之質」(『世説新語』言語篇) といえは虚弱者や弱輩者の譬喩なのであつた。⁽¹⁵⁾ つまり、「湖柳生」には「猪苗代湖畔からやって来た蒲柳のごとき短軀な羸弱者」の意が含まれており、左手の不具と五尺ばかりの軀

さらに、水楊や垂柳(学名 *Salix babylonica*) といった楊柳の類には、古来鎮痛薬や歯痛薬としての効能があることが洋の東西を問わず知られており、『本草綱目』木部には「柳枝去風消腫止痛、其嫩枝削爲牙杖、滌齒甚妙」などと記され、古代ギリシャの医聖ヒポクラテスや古代ローマの薬父ディオスコリデスは柳皮柳葉の鎮痛作用に言及してい

る。¹⁶ 一八二六年、この楊柳から有効成分が分離され、そのラテン語属名 Salix にちなみ Salicin と命名、これがのちに解熱鎮痛薬 Aspirin をも生み出すのである。サリシンは、米沢藩医の堀内忠亮が西洋薬物の効用と処方とを示した『醫家必攜』に、「近世楊皮鹽アリ撒里失涅〔稿者註…サリシン〕ト云フ解熱の效、規尼涅〔稿者註…キニーネ〕ニ及ハスト雖トモ症ニ從テハ其右ニ出ツルコトアリト云」と明記されており、この医書は幕末安政四年に「米澤日涉園藏青藜閣發」として刊行流布していたので、近隣会津の名医渡部思斎が架蔵していた可能性は極めて高く、蔵書を受け継いだドクトル渡部鼎家の書庫を日夜渉獵していた英世の目にも当然留まっていたのではないか。従って、英世の号「湖柳生」の「柳」には、障碍短軀を自嘲する「蒲柳之質」と医学に密接につながる柳由来の鎮痛薬「撒里失涅」との二重の含意があったとみて大過ないであろう。

明治二十九年八月、鼎の友人で当時東京は高山歯科医学院の講師兼幹事であった人物が、会津若松の街中に歯科の夏季出張診療所を開設する。このことが小林栄、渡部鼎に続く、第三番目の大恩人たる血脇守之助と英世との奇縁を生むことになる。「渡部家の玄閑座敷にはいつも頗る風采のあがらぬ青年がいて、汗をふきふき机に向かって医学原書、病理学書を繙いて熱心に辞書を引きながら勉強している様子であった。(中略)守之助はその非凡さと根性と努力とに驚嘆し、いつの日か東都遊学の際には立ち寄るようにと誘ったのである」(『血脇守之助傳』、以下『血脇傳』と略称)¹⁷とあり、英世は「血脇氏に接する度に、書中の疑問を深く質して止まなかつた。血脇氏もその質問があまりにも専門的に、深奥の域に達してゐたので、これは稀に見る天才的秀才であると、心中ひそかに感嘆した」(奥村『野口』)とも描写されている。英世は自身の号「湖柳生」の「柳」には歯痛薬のみならず、



上京当時の野口英世

実は柳樹の「歯木」、すなわち房楊枝たる歯刷子として長く活用されてきた歯科衛生史があることにも思いがいたり、この巡り合わせを大いなる宿命と深く感じ入ったかもしれない。¹⁸

生家の床柱に「志を得ざれば再び此地を踏まず」と鋭く刻んでのち、血脇を頼って「芝區伊皿子高山醫學院てふ有名の學校に無報酬の學僕をなし、自活して且つ充分の勉強して而かも月謝なしに講義を聞き實地を練習し事務所に控居る都合に御座候」(明治二十九年十一月一日付小林栄宛)などと上京した翌年、英世は血脇の斡旋により早速歯科医学院の研究誌『齒科醫學叢談』第二卷第一号に「日本ニ於ケル齒科醫術」を、同第二号に「結核性舌癌の實驗」を「湖柳生」の署名で寄稿しているのである。これは英世が公に筆名を使用した最初であり、周到な読者をして、楊柳と歯科医学との長年に互る親密性をも想起せしむるに十分であったであろう。¹⁹

二 高山医学院時代までの石塚三郎と漢詩文

英世誕生の三箇月ほど前、すなわち明治九年八月十五日、後年に衆議院議員を二期務めるなど渡部鼎に同じく医政にも尽力した歯学者石塚三郎は、新潟県北蒲原郡安田村(現阿賀野市保田)において父節と母ムツとの間に生を享けた。²⁰ 家業は農作であったが、父が地元の素封家で代々庄屋も務めていた旗野家に仕えていた縁から高等小学校卒業後、すぐに奉公に上がり旗野餘太郎から漢文や英語の指南を受けている。この旗野家は、歴史地理学者の泰斗で『大日本地名辭書』を編纂

したことで知られる吉田東伍の生家であり、餘太郎はその長兄であった。²²当時、餘太郎らによって「知音」の故事にちなむ哦洋吟社なる詩社がつくられ、その書楼では和漢書の輪読や作詩が頻繁におこなわれており、時には森春濤や日下部鳴鶴、鱸松塘といった著名な文人墨客が寄寓することもあったようである。²³石塚は後年に「時々詩會を催ふされる、或は又經書の講義がある、時には自分も其の席に喚ばれて茗茗「稿者註…苦い茶」の御馳走に預つた。廉堂先生「稿者註…餘太郎の号」は極めて多趣味の人で詩作もされ、時折は題を課して、自分共にも詩作を勧められた」(「在りし世の博士と予」、『吉田東伍博士追懷録』所収、以下『追懷録』と略称²⁴)と回想しており、墨擦り役のかたわら自ずと漢詩文に親しんでいたのである。

明治二十六年、郷里の先輩であり、のち衆議院議員や早稲田大学図書館長を務めた市島謙吉、号春城や吉田東伍を頼つて上京、大成学館国語伝習所の学僕をしつつ、週末には当時『日韓古史斷』『徳川政教考』の執筆に専念していた東伍を訪問し種々の教えを乞うていた。²⁵

翌年夏、箱根は塔ノ沢の環翠楼で肺療養中であつた餘太郎の看護を命ぜられた石塚は、やがて湯本の早雲寺、大磯の愛松園別荘へと転地のたびに随行し、同年十二月の臨終までかいかいしく付き添つた。

餘太郎の遺骨を擁して帰郷した石塚は、翌春のある日、大磯の高麗山に建てられていた「廉堂先生の墓碑を拜し、無量の感慨に打たれ弔詩一篇を作つた」(『追懷録』)のである。

數奇殞命亦天哉 泣籲英魂意不回
唯剩萬言經濟策 已空當代棟梁材
風吹枝上花頻落 雨灑林間鳥屢哀
西望函山雲漠漠 墓前何日掃青苔

餘太郎の死後早々に、実弟東伍は『讀賣新聞』の日清戦争従軍記者に志願し広島に急行するも、希望する陸軍は満員のためいっこうに許可が下りなかった。そのとき一面識あつた新潟県議会議長で漢詩文集『北越詩話』編纂や「清新雄麗、盡棄浮靡、而敦厚之意至矣」(市島謙吉『五峰遺稿』跋文)と評される詩作でも知られる坂口仁一郎、号五峰が偶然にも天機奉伺のため広島大本営に滞在しており、その斡旋で海軍への従軍が認められ、東伍は宇品港から濟州島近海を経て山東半島に向かうことができた。直前に『日韓古史斷』をものし「樂浪逸民」を別号としていた東伍にとって、日々の眼前には感慨ひとしおの実景が広がっていたことであろう。明治二十八年秋、帰京した東伍は本格的に『大日本地名辭書』編纂に取りかかるが、その時石塚は東伍宅に寄食しながら「當分は地名辭書の原稿の謄寫をして居た」(『追懷録』)のである。ちなみに、後年、小林栄が英世に宛てた書翰中に「予は三十五年勤續せり、過日縣知事より御褒美として大日本地名辭書、吉田東伍氏著二十圓前後ノ品なりと云ふ、頂きたり」(明治四十五年五月五日付)とあるが、文面から察するに、この時点では直接の面識のなかつた英世の親友石塚と東伍との関係について、栄は認知していなかつたことになるであろう。

さて、前引した弔詩を東伍に披露すると、意外な回答が示される。「之は眞情の發露である、自分も十七歳の頃より廿一二歳の頃は詩作に耽つた、乍去つらく考へて見ると、詩作の如きは、未熟なる學力の企て及ぶ所でない、君の如き境遇にあるもの、作詩病に陥り、前途を危うするが如きことあらば、それこそ一大事である、止めるがよい」(『追懷録』)と忠告され、石塚はまずは志した齒科医の道に邁進することになった。

これに先立つ一時期、石塚は新潟市で開業の中村勇三郎に入門して

主に義齒製作を学んでいたが、明治二十九年に再度「齒科醫たらん冀望を抱いて上京し、血脇守之助先生の門に入るつもり」であった。しかし、当時『讀賣新聞』主筆であった市島謙吉の紹介状をもってしても「何故か自分の入門を容易に許しさうもない」（以上『追懷録』）という苦境に立たされてしまう。当時高山齒科医学院幹事の血脇としては、「野口の前例〔稿者註…院長高山紀齋に無許可で無一文の英世を学僕に据えたこと〕もあるため、軽々しく承諾できない事情」（『血脇傳』）があったようである。それでも熊沢蕃山が中江藤樹に入門を懇願した故事を引いた東伍からの激励、「至誠人を動かす、（中略）根氣よく幾回でも訪問して時機を待て」により「お百度を踏んで遂に入門」（以上『追懷録』）したのである。

この時先住の玄関番であった同い年の英世と面識をもち、たちまちにして意気投合、以後長きに亙る交遊が続くことになった。玄関横待合の小房で起臥をともにした兩人であったが、英世は医科での、石塚は齒科での大成をそれぞれめざし、本郷の済生学舎に学んだ英世は明治三十年十月に医術開業後期試験に合格（第五百四号）し医師免許を取得、石塚も血脇のもと齒科技工の腕を磨き翌年四月に齒科医術開業試験に合格（第五百二号）するのであった。⁽²⁶⁾

ここで石塚と漢詩文とのつながりについて、その雅号とともに再考しておこう。石塚が師事した同郷の廉堂旗野餘太郎と松雲吉田東伍の兄弟はともに漢詩文に長じており、それは余技の域を超えるものであった。東伍には自身の詩集『松雲詩草』があるばかりでなく、未完ながら詞華集『國朝詩綜』の膨大な草稿も残されている。広島会遇に先立ち春城市島謙吉宅で東伍を見識っていた五峰坂口仁一郎は、「吉田君を憶ふ」（『追懷録』所収）において次のように詳記している。⁽²⁶⁾

君の聰明は往くとして可ならざるなしで、何につけても悟人が早く随分多方面に涉つて居る。中にも私の敬服したのは君の漢詩に於ける伎倆である。君の令兄廉堂一青〔稿者註…兄弘二〕二君及び令叔櫻坪君〔稿者註…叔父で養父の十一郎〕も俱に詩を作つた人だから、君も耳濡目染自然詩に興味を有つようになったであらうが、私は君と交はること廿餘年、君が詩を作ることを知らずにゐた。然るに六七年前偶然松雲詩草を示され、始めて君が特異の才に驚いた。松雲詩草は君が弱冠の頃から廿六七歳即ち北海道を去るまでの作である。初めは令兄か令叔かに就て詩法を聞いたであらうが、其後誰を師としたといふでなく、眞に所謂寒郷の獨學で養ふ所は知るべきものである。然るに其作品に至つては遙に令兄令叔を凌ぐのみならず、往々専門詩人に譲らざるものがある。中にも金陵行の一篇は其最なるもので筆力といひ聲調といひ巖海珊の風骨ありとも謂ふ可きものである。尤も君の長所は古體第一絶句之に次ぎ、五律七律又之に次ぐといふ順序だが元來律詩は聯を主とし、多少の技工を要するから習熟すれば却て作り易い傾もあるが、初學には入り難いものである。君の律詩はまだ技工の上に缺くる所があるまで、習熟したなら或は絶句の上に出るかも知れぬ。要するに諸體兼備したもので現に私の北越詩話には二十首ばかり採録して居るが、近時の作家中優に有数の部に入るべきものである。

石塚が東伍から「詩作の如きは、未熟なる學力の企て及ぶ所でない」と注意されたことは前述したが、廉堂松雲の兩人に強く影響を受けていた石塚は、英世との交誼を挟みつつ晩年にいたるまで「松籟」と号し、折に触れては詩作を続けていたことが知られている。⁽²⁷⁾

一方、医学の方の師であり近代歯科医療制度確立に尽力、のちに東京歯科医学院（現東京歯科大学）を設立した血脇守之助は、明治六年二月、婿養子の父誠之助、母タキの間に加藤家長男として、印旛相馬郡我孫子町（現千葉県我孫子市緑）、水戸街道沿いの大旅籠かど屋に生を享けた。²⁸しかし、幼くして父母と離別した守之助は祖父母に養育され、十八歳の明治二十年、故あつて近隣血脇家の跡目を相続し、以後血脇姓を名乗ることとなった。この間、上京して慶應義塾童子寮（明治十四年）、東京英学校（十五年）、明治英学校（十六年）、進文学舎、共立学校（十七年）、明治学院（十八年）と転学を重ね、明治二十一年に慶應義塾別科二級に入学、翌年卒業している。

これに先立つ我孫子尋常小学校時から杉山英校長の夜間塾に通い、「日本外史全集、十八史略、文章軌範、唐宋八大家文などの素読を終え」（『血脇傳』）ており、なお物足りず興陽寺住職から『碧巖録』や「四書五經」の手ほどきを受けたり、近村の私塾や島田篁村門下の親戚に漢詩文を学んだりしていたようである。

卒業後、一時政府機関紙を発行していた東京新報社に入って編輯局員を務めたが、社内での大怪我がもとで辞職帰郷していたところ、井上円了の門下生から新潟三条町の米北教校の英語教師として招聘され、血脇二十一歳、明治二十三年の年明け早々雪国に赴任することとなった。この学校は、「東本願寺の僧侶の機関学校として設立されたもので、（中略）生徒は一般に真宗の関係者の子弟で、予科二年、本科三年の課程を終了すれば僧侶の資格が与えられる規定となっていた」（『血脇傳』）が、血脇はこれを一般家庭の子弟にも開放するように進言、校長も賛同し京都本山への具申を経て四月には入学が許可されている。さらに、漢学の素養が買われて漢文教科書の編纂をも手がけ、これは二十五年に『普通漢文讀本』（樋口書屋）として木版刊行さ

れた。

この頃、血脇の下宿は商家村松屋の離れ座敷であったが、教校の布教講演から帰ると母屋の方は三条病院に改装され、院長はシンシナティのオハイオ医科大学に遊学した気鋭の田原利であり、前年に帰朝して東京茅場町に開業していたところを知人の懇願により帰郷開院していたのであった。実は、のちに不如意の血脇に会津若松への夏季出張診療を勧めたのが田原であり、この時が後年英世にも大いに助言することになるドクトル田原と血脇との最初の出会いなのであった。

さて、ある日のこと東京の友人が毎週送ってくれる英字新聞をいつものように読んでみると、米国歯科医師の広告文が血脇の目に留まった。都市部ではいざ知らず、歯医者といえは時には胡散臭い香具師の類にさえ擬せられ、「日本では見るかげもない地位に置かれている稼業だが、その混沌たる時代はその道に入って開拓の鋏を入れれば前途が開かれるというものだ」との思いが忽然と湧出し、血脇は電光石火、田原にその熱意を打ち明けた。「それはよい思いつきだ。米国での歯科医の地位はわが国とは比べものにならぬくらい高い。暗夜のような日本歯科医界を黎明の彼方に救い出せるのは君のような高潔の士によつて初めてなし得られるのだ」（以上『血脇傳』）と賛意激励されたという。

かくして明治二十六年、血脇二十四歳の春二月に米北教校を辞職、年度末には新潟三条の町を出立し、四月八日、当時芝区伊皿子町七十五番地にあった高山歯科医学院に入学したのである。カリフォルニア州の歯科医術試験に合格し帰国開業していた高山紀齋創設の同院は、「本邦唯一の歯科医育機関であつて、元スペイン公使館あとを買収して校舎としたもので、約千百十五坪の構内に、教室、治療室、機械室を以て本館とし、寄宿舎、賄部その他附属建物があちこち散在」（『血

「協傳」していたという。常に悠揚迫らぬ物腰であった血脇は、入学早々から周囲の長幼を問わず一目置かれていたようで、高山院長がシカゴ万国歯科医学会議のため渡米する七月、学院運営を万事託されて学生のまま幹事に就任している。晩学の努力が報われ明治二十八年四月、難関であった歯科医術開業試験に合格、七月に二百八十号で免許登録された。その直後から日本歯科医界の盟主たるべく学院の充実に邁進し、卒業試験と卒業証書授与式の挙行、同窓会組織院友会の発足、研究誌『歯科醫學叢談』の編輯発行などを講師兼幹事就任のかたわら同年中に次々と成し遂げている。

翌年一月、上京直後の困窮する血脇に対し自発的に毎月送金してきていた、あの田原が訪ねてくる。そして、歯科医療だけで稼ぐことを潔しとせず、歯科教育をも十分考究したいと語る血脇に、「学院の夏季休暇中ならいいだろう。今、会津ではやっているドクトル渡部鼎は、僕の米国留学中の同窓の友だが、そこへ紹介するから、出張診療をやってみないかね」（『血脇傳』）と勧めるのであった。これが血脇と英世の同年夏の運命的な邂逅となり、九月の上京後すぐに医師開業前期試験に合格するも貧苦に喘いでいた英世が、十一月三日、高山歯科医学院に「今はもう無一物になつたのです。それで當院の人力俵夫にでも使つては頂けないでせうか」（奥村『野口』）などと、図々しくも転がりこむきっかけとなつたのである。同じ頃に、血脇を頼みに日参数十回に及んでいたのが石塚であり、翌明治三十年四月二十四日、書生として採用され英世と起居をとにもすることにしたのであった。

ところで、私見によれば青年石塚は、この時点においては未だ号「松籟」を用いていないと思われる。それでは、石塚のこの雅号はいつから使用され、また、それは何処に由来するのであるか。

大正十三年五月十七日、第十五回衆議院議員選挙に憲政会から立候



盟友・石塚三郎

補した新潟五区の石塚は、見事初当選を果たす。七月には新潟県歯科医師会会長を辞任し、歯科医界のため中央政府で奔走することとなる。翌年二月七日、衆議院本会議に第三次歯科医師法改正案が歯科界を代表する石塚によって提案される。この趣旨説明が終了するや議長指名の委員に本案附託を希望する動議が出され、その九名からなる特別委員会は審議修正のうえ満場一致をもって衆議院を通過、貴族院へ廻附された。貴族院では衆議院に一部修正が加えられて再廻附、衆議院はこれを諒承して三月二十日、「公法人としての歯科医師会を認めた画期的内容の歯科医師法が成立し、四月十三日公布、ここに日本歯科医師会誕生のレールが敷かれることになった」（『血脇傳』）のである。大正十五年十一月には日本歯科医師会が設立され、おそらく石塚の念願通り初代会長には血脇守之助が就任した。

時を同じくして、石塚は月刊『自治』（新潟県町村会発行）の文芸欄に、号「松籟」を用いて漢詩を投稿するようになる。それは、大正十四年二月一日発行第二巻第二号から、昭和三年の英世殉職を挟んで、昭和十一年四月十五日発行第十三巻第四号までの十二年間に互り、計二十首ほどの漢詩が陸續掲載されている。若かりし頃、恩師吉田東伍から作詩病に罹患するなど忠告されていた石塚であったが、後述する親友との交遊に、国政や厚生行政の気晴らしにと時折詩作に耽ることがあったのである。

それでは号「松籟」は、それが頻見されるこの政界進出の頃より使用されたのであろうか。実は石塚を語る上で欠かせない一視点とし

て、英世の母シカを撮影したあの素人写真家としての側面がある。近年、石塚旧蔵の硝子写真乾板が子孫宅で大量に見えられ、当時の安田町立吉田東伍記念博物館準備室（現阿賀野市立吉田東伍記念博物館）に寄贈管理されている。明治三十六年発行、東京写友会「寫眞」第三年第一号の会員名簿に「(特制會員ノ部) 越後國古志郡長岡町 齒科醫 石塚三郎君」とあり、同年五月に石塚は支部たる北越写友会を発足させ、副会長として活躍している。この会は、毎月課題を設定しての品評会と春秋の撮影会とからなるかなり組織立ったものであったらしい。「稿者補・毎月の課題をみると」四季折々の風物を写真の中に取りこんでいこうとする、俳句の『歳時記』にも似た美意識が写真家たちを強くとらえていたことがわかって興味深い。実際『会報』に掲載されている会員たちの作品には、タイトルやデータとともに俳句、短歌、漢詩などが付されており、当時の写真家たちに江戸時代以来の伝統的な文人意識が備わっていたことは間違いないだろう（飯沢耕太郎「北越の素人写真家・石塚三郎」³⁰）とあり、「松籟」の号で多くの写真が詩文を伴って投稿されていたことが知られる。こうしてみると、明治四十年前後から写真家石塚としての「松籟」使用が確認できるのである。

ところが、ここに一葉の「保齒要言」と題された興味深い広告がある。日清戦争での勝利は、眠れる獅子を愛猫のごとくみなす風潮を生み、産業界のみならず医学界にあっても東洋で先進する日本の医療を大陸にもたらしてやろうとの機運が高まっていた。明治三十一年、日本医事週報社の川上元治郎は、「漢学の素養があり、かつ英語にも堪能という条件を満たすとともに政治的手腕もあり、豪胆でなければならぬ」(『血脇傳』)人物として血脇にその白羽の矢を立てた。躊躇した血脇であったが、結局医学院の主幹を石塚に委任、研究誌の編輯は



血脇渡清記念写真 (明治31年6月30日)

2列目左から4人目・血脇、右から2人目・英世、
1列目右から2人目・石塚

上海での歯科診療広告「保齒要言」

英世と石塚とに依頼して七月に渡清したのである。清国到着後は、芝罘、天津、北京、上海と歯科診療を実施しながら当地の名士との交流をも深め、「日本牙大夫血脇守之助」として盛名噴々たるものであったらしいが、当初からの助手が病を得て帰国してしまったため、急遽石塚が天津滞在時に呼ばれたのであった。明治三十二年四月、上海における開業時に宣伝した散らしが「保齒要言」なのである。そこには、

「牙醫」として「血脇天籟」と並び「石塚松籟」の名が明示されているのである。管見の限りでは、この頃に雅号「松籟」の萌芽があるのでなかろうか。

そもそも、血脇の雅号は「天籟」であり、その使用がいつ頃までさかのぼれるかは不明瞭ながら、明治二十六年六月の『日本医事週報』紙上に川上元治郎が巖華の筆名で「保齒要言」と確認できるので、高

説いた主張に反駁した際の署名が「血脇天籟」と確認できるので、高山歯科医学院入学後の早々には用いていたらしい。その後もたびたび

使っていたことは、先の広告や北京滞在時に交誼をもった陸軍大臣徐
 郟からの揮毫「脣齒長相倚 血脇天籟先生 兵部尚書徐郟」から明らか
 である。

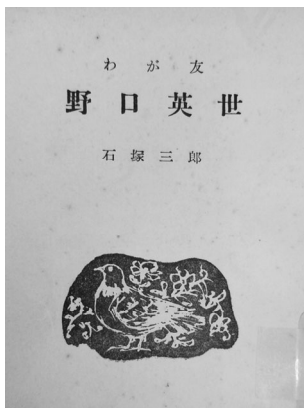
石塚の「松籟」は、陳腐とまではいわないものの、さほど深奥さを
 感じさせない雅号である。「松の梢に吹く風音」を意味する「松籟」
 は、唐代以後の漢籍にいくつか出典を見出せないでもないが、むしろ
 「茶釜のたぎる音」として数寄道の和臭すら漂う語である。やはり、
 前掲「保齒要言」においての併記から推されるように、「松籟」の籟
 字は恩師血脇の「天籟」から一字拝借したのであろう。ちなみに、
 「天籟」は『莊子』齊物論篇、楚国の哲人南郭子綦と子游との問答に
 「汝聞人籟而未聞地籟、汝聞地籟而未聞天籟夫」などと語られるもの
 で「天然に発する音」を指し、文学的には「絶妙好辞」の意も含まれ
 る。そして、「松籟」の松字こそは、弱年期の師吉田東伍の号「松雲」
 から採ったのではなからうか。

東伍の詩集『松雲詩草』の自序冒頭に、「松雲生越後蒲原郡人、幼
 習文、少年坦蕩無他異、耕暇耽詞章」とあり、市島謙吉は「君は若い
 時分に松雲と號し」（吉田博士に就て、『追懷錄』所収）ていたと回想
 している。東伍の多くの別号、自嘲的な「孤負子」「蟻斧生」「落後
 生」、東字を分割した字謎「日本居士」、朝鮮趣味の「樂浪逸民」に比
 して、最も作詩における雅号にふさわしいのが「松雲」であろう。
 以上要するに、石塚自身の明言はないので確証が得られたわけでは
 ないが、これが偶然の一致とは思われず、かつ使用の時期的にも問題
 はないので、号「松籟」は石塚から両恩師への敬仰の産物とみなして
 よいのではなからうか。

三 英世と石塚の友誼および漢詩の唱酬

昭和二十四年十二月、石塚三郎は財団法人野口英世記念会の理事長
 に就任した。それまで日本医師会館内（千代田区神田駿河台）に置かれ
 ていた本部事務所を独立させるべく、石塚が購入していた新宿区大京
 町の土地建物一切を財団に寄附した上でのことであった。石塚は大正
 六年、日本初の大規模な歯科病院を新潟市上大川前に開院し、さらに
 は石塚歯科研究会を組織して会員の技術向上等にも努めていたのであ
 るが、国政への進出や野口英世記念会、及び同記念館の設立に尽力す
 るため、徐々に活動の拠点を東京に移し、昭和十三年には新潟の石塚
 歯科病院を閉院していた。もともと、生来の歯科医界への情熱は抑え
 がたかったようで、この間に東京歯科医師会四谷区支部長に就任（昭
 和九年）したり、赤坂溜池診療所を開設（十二年）したりしている。

理事長に就いた翌年、石塚は財団収入源の一環として事務所内に歯
 科のみならず内科外科を掲げる野口英世記念会診療所を開設し、所長
 を兼務することになる。その後も猪苗代野口英世記念館の福島県登録
 博物館第一号の実現（昭和二十九年）、野口英世記念医学賞の制定（三
 十一年）や同奨学金制度の実現（三十三年）に奮闘するなど、晩年は
 盟友の英世にすべてを捧げた人生であった。



『わが友野口英世』
 （昭和28年初版）

「『石塚君、君には感謝して
 いるよ、君はい、人だ、親切
 な人だ』あの晩私の前にうつ
 むいて語った野口清作の姿
 が、いまでも私の眼の前にあ
 るような気がする」（石塚三
 郎『わが友野口英世』、以下石

塚「わが友」と略称³²)と回想する「あの晩」とは、石塚と英世とが高山歯科医学院で出会って間もない頃のことである。同い年の兩人は当初から情意相和したようであるが、英世の方は早々に、「彼」稿者註・英世」は何事に限らず、精根の續く限り、徹底的に遂行せねば、止み難い性質である。良い意味に於ては、精力家、天才家として驚嘆もされ、賞揚もされてゐたが、或る方面に於ける、この性癖は、時に世人をして矚覺せしめるものがあつた」ようで、血脇や石塚らごく数名を除く周囲からは、異口同音「彼は熱情的で、夢想的で、法螺吹きで、彼の今やつている亂行は、周知の事實ではないか。もう見限つて了つたらどうだ」(以上奥村『野口』)と悪評紛々をもつて迎えられる。醫師開業後期試験に臨む英世が長谷川泰開校の済生学舎に通学するための学費と下宿代全額の面倒をみたり、英世の学資調達のためにわざわざ能登半島へ出張診療に向いたりする血脇であつたが、渡清後の留守居役石塚宛の書翰には、「貴君及野口君の小使衣物代ハ學校金の殘餘中より無遠慮御使用被下度、決してくく御遠慮ニハ不及申候、但如何なる種類の金にても帳簿ニ記し置被下ば其にて結構、(中略)小生の衣物も兩君にて間にて合ひそうなるものは隨意御使用不苦候」(明治三十一年九月六日付)などと事細かに氣遣つてもおり、確かに常に「變態的性格を發揮」(牛庵野人「野口博士逝去」³³)している「あんな男の世話をする守之助は大馬鹿者とさえ極言すものが現れる始末」(『血脇傳』)であつたのも首肯できよう。

かたや石塚は石塚で、「稿者補・英世左手の不自由を氣遣い」朝夕の仕事の中でも、出席簿の始末や、ランプ掃除や、廊下講堂のふき掃除などに至るまで、凡そ両手を要する仕事は一身に引受けて」(石塚三郎「若き日の野口英世博士」³⁴) やつたり、時には「何ヶ月も刈らぬ頭髪は、蓬の如く、錢湯に行くことさへもなかつた」むさ苦しい英世と

ひとつ夜具のなかに潜りこんだ翌朝、「二抱へ程もある大盥に水を滿々と汲みこんで置いて、それが夏の灼熱の強い陽光で丁度温まつた頃になつて、『うまい、うまい…』と二人は、手を打つて、この王侯の贅にも優つた太陽温泉で、垢や汗を洗ひ流し、「文無し」の二人にとつて、至極恰好な燃料いらすの行水」(以上奥村『野口』)を堪能したりするといった、何とも仲睦まじき交わりを続けているのであつた。

明治三十一年秋、英世は恩師榮の夫人シユン重病との報を受け急ぎ帰郷、「日夜看病に盡力、まことに親切」で、身辺の瑣事にいたるまで「八人藝」稿者註・一人八役で音曲を使い分ける寄席芸」をして居つた」(小林『思出』)らしいが、諸事放置しての帰省であつたため、石塚には「出發の際一方御厄介様に相成忝敷御禮申上候、爾來病病思はしからず、日夜詰め通しにて小生も心身疲勞甚敷御座候、(中略)然れ共師弟の情實のあるれば自由にふり切り上京する譯にも不參、有爲の今日を徒消する次第御高察被下度候」(三十一年八月六日付)と素直に真情を吐露している。その後の石塚からの強い帰京催促には、「小生今日の境遇は實に平重盛の二の舞ひにて、彼に忠ならんとすれば是に孝ならず、進退維谷まるの秋に御座候」(八月十六日付)と、その懊悩を『詩經』大雅「桑柔」中の「進退維谷」を用い、さらに「欲忠則不孝、欲孝則不忠、重盛進退窮於此矣」(『日本外史』)になぞらえて漏らしてもいる。ちなみに、この帰省中たまたま一読した坪内逍遙『當生書生氣質』に登場する自堕落な医学書生「野々口精作」と己が名や行状が「照魔鏡にかけられた如く」(奥村『野口』)酷似することに心慌意乱、榮に改名を懇願し「醫者の英雄になつて、世界によい仕事をしろといふ事になるのだ。あんまり立派すぎる。過分であらう」(小林『思出』)とたしなめられつつも、結局、榮の名乗「英延」に同

じく小林家代々の通字「英」の一字をもらって「英世」と命名してもらうのであった。⁽³⁵⁾

帰郷前年の夏、実技のある医術開業後期試験に向け、英世は血脇の紹介により不自由な左手の再手術を成功させ、施術者の帝大近藤次繁博士からは打診法の教授まで受けていた。この時入院先の医科大学第一医院から榮に送った書翰（明治三十年八月二十三日付）に一詩が添えられているが、これは意外なことに榮に呈した現存する唯一の正則の漢詩であろう。⁽³⁶⁾

黄塵萬丈と車場の雜鬧とは生の最も惡む所に御座候、東下の月も憎からず、不忍池の白蓮、夕陽に映して客衣に清香を満たし、轉た磐峯の古蹟も忍ばれ申候、或る日の曙に洗足にて遊びにき折二

殘月欲低樹色微 雨餘江畔行人稀

荷華遍發曉烟裡 風送清香滿客衣

恩師昨今の御樂しみは如何にや、嗚呼禾稼穰食して薰風軒に盈つるの夏景想やられ申候

「目下舊床上に平伏罷在候」などと病室で無聊を託っていたからか、散策の即詠に「いぶんと推敲を加えた」とみえ、仄起式の平仄にかない韻も平声三十韻の「微」できちんと踏んでいるのである。このことは石塚との詩の応酬以外、英世詩にあつてはむしろ珍しいことである。

「残月低れんと欲して樹色微かなり 雨余の江畔行人稀なり 荷華遍く發く曉烟の裡 風は清香を送りて客衣を満たす」とでも訓じておくが、月並みながらなかなか気どった詩文の末尾に「五圓程御惠送被成下

度願上候」と恩師にいつもの無心するところが何とも英世らしい。

この頃、英世は「醫者ではなく、學醫と云ふ方に志して居つた様に考へられ」（小林『思出』）、順天堂での『醫事研究會雜誌』編輯、高山齒科医学院での夜間講師を務めるなか、「僕はこの頃、しきりに自己反省をしている。どうも自分は実地医術家には不適當だと思ふのだ。（中略）僕としては北里伝染病研究所の方に転じて、細菌学を研究したいと思つている」（石塚『わが友』）と告白している。明治三十一年四月、順天堂医院長佐藤進の添書と日本医事週報社長川上元次郎の周旋とが奏功し、英世は北里柴三郎博士の伝染病研究所の下級助手に採用された。正式所員としてではなかったが、「帝大醫科出身の者でない」と、助手にも採用しない」（奥村『野口』）というこの世界的な研究所への出入りを許されたのは、当時破格のことであつたらしい。

北里の「五年も経てば、こゝから洋行させてやる資格が出来る」（奥村『野口』）との言に奮起して詠んだ詩が石塚によって記録されている。

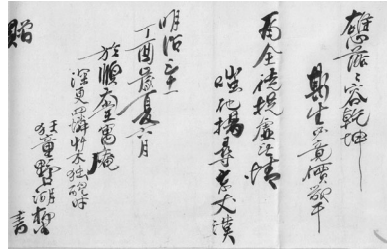
男子玉成志尚存 瓦全豈敢老塵焚

任他燕雀嘲鴻鵠 一躍何知千里翻

「この詩は未定稿ではありますが、当年の彼の呑牛の気が、よくこの二十八字に横溢していると思います」（石塚『わが友』）と書き添えられている。詩中の「瓦全」は、つまりぬ瓦が割れずに保全される喩えから、大したこともせず長生きをする意であり、これは『北齊書』元景安傳に「大丈夫寧可玉碎、不能瓦全」と「玉碎」（貴重な宝玉が砕け散る）に対応してみえる語である。実は、郷里の幼なじみ八子弥寿平に宛てた同時期の書翰中の詩にもこの「瓦全」語が使われてい

る。その冒頭「小生の心情は今日實に火よりも烈しく、トテモ同朋儕輩とは肩を伍し牛逐ひ太郎視せられ度は思はず候」（明治三十一年六月十三日付）などと大言壮語し、ひたすら欧米での熱い研究志望とそのため費用捻出とを懇願する長文の最後、俳句「まておのれ咲かて散りなば何が梅」に続き次のような詩が書かれている。

雄心落落容乾坤 斯生必竟價幾千
瓦全徒捉虛無情 嗤他揚尋忘丈漢



八子弥寿平宛書翰末尾の詩
「狂童野口湖柳生」の署名が見える

起句、藤田東湖『八月十八日夜夢攻諳厄利亞』詩の「雄心落落壓胡城」（雄々しき志は壮大で異国の城塞をも押し潰す）を引き、自身の研究能力や学識が外国でも十分に通用するもので、時には圧倒する力量であることを洋行前から誇示している。前掲詩に同じくはなはだ韻律の整わないあくまで漢詩風の代物であるが、「瓦全」はこの頃の英世の信条表現である。

さて、大正四年四月二十一日、日本写友会と石塚率いる北越写友会とが、春季聯合撮影会を福島県磐梯山周辺、及び猪苗代湖畔にて開催した。石塚は、この機にかねてよりの計画を実行に移す。それは、「急いで車を猪苗代亀ヶ城の小林栄先生の宅へと走らせ、三城潟へ同行を懇望しました。先生の力をかりて、野口君の母親の写真をとり、それをアメリカへ送って彼の帰国を勧告したい」との考えであった。突然の来訪と撮影依頼とに驚く母シカは、「とんでもねえこった。髪

も乱れているし、着物も着替えなきゃなんないよ。勘弁して下っせいや」とだいたい拒絶したようであるが、栄の「そのままの姿がいい、石塚さんは英世とは高山医学院で一つ鍋をつついた仲だ。わざわざお前さんの写真をアメリカへ送って下さるといふんだ。英世はどんなに喜ぶかもしれない、遠慮はいらない、さあ撮っておもらいなさい」（以上石塚『わが友』）との助言で、あの有名な「痛ましくも尊い姿」（奥村『野口』）の肖像が残されることとなる。栄は石塚と初対面したことを英世に知らせ、「城家の貧乏世帯を實見せしめしは反つて汝の光を増すものなり、先方の請求を拒みて母上と家を見せざるハ反つて悪しからんと考へて同行したる事二候、同氏より右寫眞を汝ニ送る事と存候」（大正四年四月二十二日付）と書き送っている。



石塚撮影による母シカ

その撮影は、「日は暮れかかり、雨さえ降って来ました。技師の私は雨にぬれながら三脚を立て、ピントを合わせにかりましたが、光線が届かないので、とてもものになりそうもない。そこでいぬ女「稿者註…英世の実姉イヌ」に台所の吊りランプをはずして母親の傍に持つてこさせて、やっとピントを合わせ、くもったレンズを手早く拭いて三十秒ほどシャットしましたが、はたして写っているかどうか、心許ない限り」（石塚『わが友』）であったらしい。

その前年、在ニューヨークの英世は栄宛の書翰において、「若シ出来得ルナラバ最近ノ御寫眞「稿者註…小林夫妻の寫眞」、及城母「稿者註…実母シカ」ノ寫眞ヲ取ラセ御送り被下度願上候」（大正三年一月十八日付）と依頼している。これは栄によって、「先般當家庭前にて、



小林家庭前での写真

右から小林栄、野口シカ、栄夫人

三人「稿者註：小林夫妻とシカ」にて及び一人ツ、と二通りニして六角集二君「稿者註：英世の同窓六角讓の弟」ニ依託撮影候處よくとれ候」（十二月三日付）、そして、「母上と予の寫眞當地出來の粗末なるものなれども四枚郵送せり、到着候事と存候、其前ニ多分石塚氏手取りの

寫眞相送候半、ランプを點して母上を撮影せし故出來ハよろしからざりし」（大正四年六月十日付）としてきちんと応えられており、英世は「御惠贈の寫眞四葉頂き久振りにて慈顔ニ接せし心地し快事是ニ不過候、二枚は家に安置し二枚ハ常ニ小子の懷中ニ入れ身體を離さず候、小子の奮勵ニ大なる訓陶と相成申候」（七月四日付）とすぐに礼状を返している。

しかしながら、栄が「その前に石塚撮影の寫眞の方が届いているだろう」と記した例のシカ像については、「石塚よりハ寫眞送り來らず候、多分不出來なりしならん」（七月四日付）と英世は答えており、五月には送られたはずの石塚寫眞をこの時点では見ていなかったことになる。これに先立つ書翰にも「「稿者補：石塚撮影の」城母の寫眞は多分六ヶ敷有之候半」（五月二十一日付栄宛）とあり、たいして期待はしていなかったようである。もつともこの頃の英世は、日夜研究に没頭するかたわら多くの講演、來客、來信などにきわめて忙殺されていたから、実は届いていながら放置されていた可能性はある。

ここでなお注意すべきは、栄が送った方の六角撮影寫眞に対し、英世が「父上様「稿者註：栄のこと」も昔のおもかげが其儘にてなづか

しく覺ひ候、城母は十五年前よりハ老ひたるも精神も身體も共にいさましく小子の心を強からしめ申候」と評し、「若し都合よければ今秋二寸歸省するやも知れず候」（七月四日付）と述べていることである。この時すでに英世は渡米して十五年、ロックフェラー医学研究所正員として許多的研究成果を上げた斯界の寵児であり、欧米各国からの学位や勲章授与に続き、遅まきながら京都帝国大学から医学博士（明治四十四年）、東京帝国大学から理学博士（大正三年）の学位が、帝國学士院から第四回恩賜賞（大正四年四月）が授与決定されていた。恩賜賞というこの上ないはれの授与式（七月五日）でさえ「旅費甚だ遠く小生目下の境遇之を許さず候」（五月二十二日付血脇宛書翰）といつて帰国せず、恩師血脇を代理に立たせていた英世であったが、受賞の前日にしたためたこの書翰ではすでに帰朝を仄めかしており、従来の諸伝記が語る、石塚撮影のやつれた母シカ寫眞が帰国の契機とする以前から、その思いが一定程度はあつたことがうかがわれる。それも衰弱した母の姿ではなく、「精神も身體も共にいさまし」き壮健なるシカの寫眞を見ながらの筆なのである。

さて、栄への返信直後に手元に届いたのであるうか、あるいは栄からの手紙に触発され、堆い書類書翰の山から搜索されたのであろうか、その二週間ほどのちの七月二十日、英世は五月十五日に投函されていたはずの石塚の手紙と多くの同封寫眞とに対しようやく返書をしたためる。漢詩の和韻が含まれるため、まずは石塚書翰全文を掲げ、解説と漢詩の解釈とをおこなおう。

【石塚三郎から野口英世】大正四年五月十五日付

拜啓、老兄には其後彌々御清勝に渡らせられ候事と奉慶賀候、扨て磐梯山嶺の躑躅花は、今や爛々と燃えなんとし、猪苗代湖畔の

楊柳も亦綠滴らんとして千條の絲を垂れつつあり、回顧すれば光陰矢の如く一別十五年を過ぐ、君は天涯萬里の異郷に在りて赫々たる功名を四海に輝かざる事に比し、予は碌々として吳下の阿蒙に過ぎず慚愧に堪えず候、過般同士と謀り猪苗代湖畔に撮影大會を催し、途次小林先生を訪い同道車を連ねて三城潟なる御母堂を慰問致し候折柄、春雨絲の如く降り初め時刻は薄暮に迫り居る事とて、御令姉の手を借り洋行燈の光により御母堂を撮影仕候、茲に風景寫眞數葉を添えて御目に掛け候、寫眞の不出來は勿論に候も、御覽の通り御母堂は一見頰瘦せ氣色衰え心身共に疲勞の状態面に現れ來り候、最早や餘生の長きを望み得ざる有様、此際萬難を排して歸國せられずんば後日噬臍の憾を遺すも猶及ばざるべしと存候、想うに君の研究事項は身邊に蝟集して、湖海の如く盡くるの期無からんも、須らく快刀亂麻を斷つの決心を以て、祖國の父母師友の爲めに、君の得意なる英斷を發揮せられんことを切望して已まざる次第に候、磐嶺の紅葉、湖上の白雲、君の錦衣歸國を待つや切なり、請う躊躇することなからんことを、終に臨み一絶を賦して御座右に呈す、此次韻を賜らば幸甚之に過ぎず候

三城春老柳花飜

杜宇聲聲月有痕

千里憶君勞遠夢

母矣旦暮倚閨門

大正四年五月十五日

松籟 石塚三郎

湖柳 野口英世 仁臺 侍史

尚當院開業十周年記念寫眞一葉お目にかけ候

石塚は、母シカ撮影時の様子を語り、「御母堂は一見頰瘦せ氣色衰え心身共に疲勞の状態面に現れ來り候、最早や餘生の長きを望み得ざる有様」などと大仰な描写を附し、「萬難を排して歸國せられずんば後日噬臍〔稿者註…臍を嚙む〕の憾を遺す」となかば脅している。前述したように、石塚書翰より以前に帰朝の意志が芽生えていたことは、七月四日付で榮に宛てた一文「今秋二一寸歸省するやも知れず候」から明白であり、これは翌五日に授賞式があるも自らは出席できない恩賜賞をまとい、金策のうえ凱旋歸國する意が強くなってきたことが大きいと推されるが、この時同封されていた榮邸庭前で撮った母シカの「精神も身體も共にいさましく小子の心を強からしめ申候」という凜とした身ぎれいな姿に比して、石塚書翰に同封されていた、燈火の薄明かり下で撮られた肖像があまりにも急激にやつれ果てていたため、「どうも母は衰弱した様だ、これでは大變だ、早く行つて會はなければならぬ。もしもの事があれば大變なことになる」(小林『思出』)と驚愕し、大きく帰國の実現に傾いたことは想像に難くない。³⁸⁾

恩賜賞金一千円は、すでに渡米時の借金返済や恩人への謝礼、榮によつて恩賜田と命名された田畑の購入ですつかりなくなつていたから、旅費の工面は、星製薬会社の創業者で「東洋の製薬王」と呼ばれた友人の星一によつてなされた。英世は早速にも「ハハミタシ、ニホンニカエル、カネオクレ」(奥村『野口』)と打電懇願、その心中をよく察する星は、直ちに五千円もの大金を送つたという。なお、星はその後も物心両面で英世や実母を支えている。シカの元へは「星君よりハ毎月十五圓づ、送金有之申候」(大正七年二月三日付英世宛小林榮書翰)とあり、スペイン風邪によりシカが逝去した際には、榮によつて

生々しく「遠方ノ人ノ見舞ハ、二十圓弔電手紙血脇、十圓弔電赤津、菓子一圓餘金五圓弔電文奧田秀次、菓子二圓位金五圓電報宮原、菓子二圓位電報安樂、三百圓電報星、人ノ驚カンヲ恐レ「稿者補・星からの香奠額は」公表セス、榮「稿者註…ここでは英世の甥」、二瓶「稿者註・村長二瓶蓮三郎」二人ニノミス」(大正七年十一月十九日付)などと英世に報告されている。

さて、石塚の七言絶句であるが、平起式にほばかない韻は平声三十二韻「元」をもって「飜」「痕」「門」ときちんと踏んでいる。

【書き下し文】

三城 春老いて 柳花飜り

杜宇声々 月に痕有り

千里憶ふ 君が遠夢を勞するを

母は旦暮 閨門に倚る

【語釈】

三城…英世の生まれた耶麻郡翁島村大字三ツ和字三城潟のこと。母シカや姉家族らが暮らしている。

柳花…柳絮に同じ。春に飛び舞う柳の種子で、白い綿毛を伴っている。文中の「猪苗代湖畔の楊柳も亦緑滴らんとして千條の絲を垂れつつあり」を受けているが、英世の雅号「湖柳」が意識されているように思われる。

杜宇…杜鵑、子規、蜀魂、不如帰などに同じくホトトギス。戴叔倫『暮春感懷』詩に「杜宇聲聲喚客愁、故園何處此登樓、落花飛絮成春夢、澹水殘山異昔遊、歌扇多情明月在、舞衣無意綵雲收、東皇去後韶華盡、老圃寒香別有秋」とあり、全篇が踏まえられていよう。『華陽

國志』等によれば、「杜宇」は古代蜀国の王名で、死後その靈魂はホトトギスと化し、また蜀滅亡の際には「不如歸」(帰るにしかず)と啼きながら血を吐いたという。

月有痕…「月痕」は月影であるが、ここでは明け方の空に痕を残す月の意であろう。徳大寺実定「ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる」(『千載和歌集』)を唐めかしたのではなからうか。月下に鋭く啼く「不如歸」たるホトトギスに故郷を思い起こすというのは漢詩の常套であり、承句「杜宇聲聲月有痕」は単なる叙景ではなく、英世に帰郷を促す意を強くこめているのである。

遠夢…遙か遠い地を夢見る。李白『憶襄陽舊遊贈馬少府巨』詩に「歸心結遠夢、落日懸春愁」とあり、故郷に帰りたいたいという「歸心」とともに詠われている。

母矣…『詩經』小雅「蓼莪」に「父兮生我、母兮鞠我、拊我畜我、長我育我、顧我復我、出入腹我、欲報之德、昊天罔極」とある。「兮」は口調を整え、また余情を添える助字。なお、石塚『わが友』、丹実『野口英世(書簡)』⁴⁰、『野口英世書簡集I』は「母矣」に作るが、本来は「母兮」であるべきで、石塚のうろ覚えによる誤謬か『わが友』の誤植であろう。⁴¹『詩經』に同じく「母兮」であれば平声「齊」韻で平起式にかなうが、「矣」では仄声「紙」韻になってしまう。ここはやはり「蓼莪」の「父が我を生み、母が我を養う、撫でさすり、食べさせてくれた、成長を見守り、お育て下さった、その恩義に報いたく思うのだが、天のごとく果てなき大ききゆえ、お返しする当てが立たぬのよ」という詩意のなかに典拠をみたい。

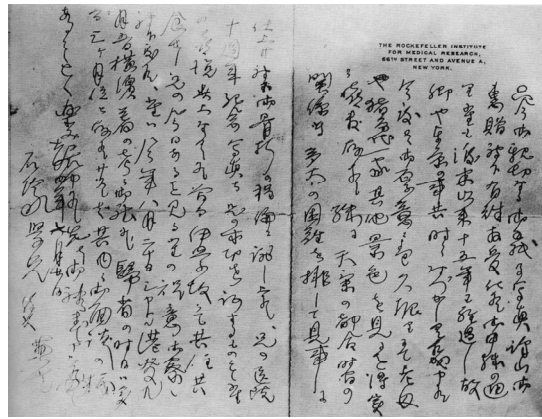
【通釈】

故郷三城潟村の春はたけなわ、柳絮が飛び舞い

ホトトギスの声が有明月のもと鋭く響き渡る
君が遠い地を夢見て憂えていること、千里の彼方から思いやる
偉大な母上は、朝な夕な村里の門で君の帰郷を待つておるぞ

続いて、石塚書翰に対する英世からの返書を掲げ、解説と漢詩の解
釈をおこなおう。

【野口英世から石塚三郎】大正四年七月二十日付



只今御親切なる御手紙に

寫眞澤山御惠贈被下有難

拜受仕候、御申越の通り

小生も渡米以來十五年を

經過し故郷や東京の事共

時々なつかしく相成申

居、今度は御厚意により

久し振りにて老母や猪苗

代一家其他景色を見るを

得、實に嬉敷存候、殊に

天氣の都合時間の關係等

多大の困難を排して見事

に仕上げ被下、御骨折の

程偏に謝し上候、兄の醫院十周年記念寫眞は兄の成功を證するも

のにて小生の喜悅此上なく候、曾て伊皿子坂にて共住共食せし兄

の今日あるを見る小生の祝意御察し被下度候、小生は今年八月二

十日シヤトル港發九月五日横濱着の考に御座候、歸省の時日は多

分三ヶ月位と存候、サスレバ其内に御面談の機あること、樂み居

申候、先は御禮まで申上候 匆々

大正四年七月廿日

英世

石塚學兄 侍史

尚貴下より寄せられたる詩に對し次韻して別紙に記載致置候間、

御晒正被下候はば幸甚

身似孤鴻千里翻

自憐遊跡不留痕

分明昨夜還家夢

奴僕歡迎母待門

ここでの英世の返書は意外にも冷静沈着である。石塚の撮影を「天
氣の都合時間の關係等多大の困難を排して見事に仕上げ被下」とねぎ
らうも、「老母や猪苗代一家「稿者註・小林栄家」其他景色を見るを
得、實に嬉敷存候」などと、この手紙のなかで母シカの憔悴ぶりには
触れられていない。最早帰国の旅程も決まり旅費の工面にも首尾よく
成功した英世の逸る心は、懐かしくも美しい郷里の山河で満たされて
いたのかもしれないが、帰国後に新潟は長岡市の石塚邸において、な
かなか達筆な一書をしたため親友に贈り、この時の真情を次のよう
に回顧している。

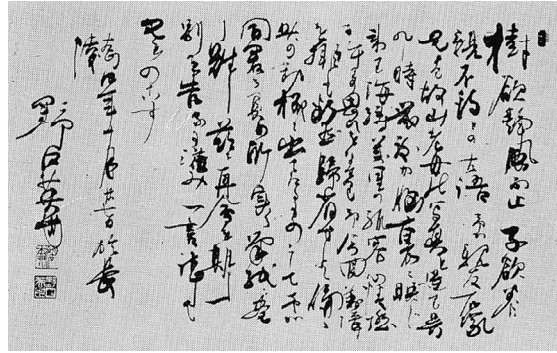
弄清泉（朱文冠冒印）

樹欲靜風不止子欲養親不在との古語あり予が親友石塚兄より故山

老母の寫眞を送り呉れられし時幾度か腦裡に映じ來り海濤萬里の孤客心情炎ゆる許りの思ひをなせり予今回萬障を排して斷然歸省せしは偏にこの動機に出でたるものにして予が同君に負ふ所實に筆紙に盡し難し是處に再會を期し一別を告ぐるに蒞み一言誌して兄にのこす

大正四年十月廿七日於長陵

野口英世 湖柳（朱文印） 野口英世（白文印）



劈頭、『韓詩外傳』卷九から「夫樹欲靜而風不止、子欲養而親不待」を引き、親には生前こそ孝行せよと、いわゆる「風樹之嘆」を述べている。これは、例えば「母上ハ汝の成功ニよりて他日を樂ニはたられ居候間、前書申送候通り樹欲靜風不止、子欲養親不在の名句を忘るゝ事あるべからず」（明治四十四年五月十二日付）などと榮から英世への訓誡にたびたび用いられていた文句であった。文中「今回萬障を排して斷然歸省せしは偏にこの動機に出でたるもの」とあり、この動機とは石塚から送られた「故山老母の寫眞」なのであるから、それ以前からの思いは常態としてあったとはいえ、帰朝実行へと大きく舵を切った一番の誘因が石塚撮影のシカ像にあったことは間違いないなろう。

さて、英世の七言絶句であるが、和臭が強いものの仄起式にはかない、押韻は石塚詩と同韻を用いてきちんと次韻している。

【書き下し文】

身は孤鴻に似て 千里翻り
自ら憐れむ 遊跡の痕を留めざるを
分明たり 昨夜還家の夢
奴僕は歓迎し 母は門に待つ

【語釈】

孤鴻…群れを離れた一羽の雁、孤雁。阮籍『詠懷詩』其一に「孤鴻號外野、翔鳥鳴北林、徘徊將何見、憂思獨傷心」とある。

千里翻…石塚によって記録された北里研究所時代の英世詩に、「任他燕雀嘲鴻鵠、一躍何知千里翻」とある。

遊跡…立ち寄った痕跡。ここでは遊学先での足跡を意味し、「遊跡不留痕」で欧米各国を巡りながら大した業績を残していない、と謙遜した言い回しになっている。

還家…家に帰る。王維『送丘爲落第歸江東』詩に「憐君不得意、況復柳條春、爲客黃金盡、還家白髮新、五湖三畝宅、萬里一歸人、知爾不能薦、羞稱獻納臣」とある。李端『送鄭有入蜀』詩には「在世誰非客、還家即是鄉」の一句があり、故郷の我が家に帰る意が強い。

奴僕…召使い、しもべ。ただし、丹実『野口英世（書簡）』、『野口英世書簡集Ⅰ』では「昔なじみ」を意味する「故旧」に作っている。おそらく「奴僕」語は一見して不穏当であり、この一句を「故郷の奴僕らが錦衣帰朝した私英世を歓迎してくれた」などと傲岸不遜に解釈されかねないと判断したと思われる。実は、この改変の出所は石塚なのである。大阪府箕面市に英世の銅像が建てられた昭和三十年、帰朝催促時の唱酬詩を紹介する文中において、おそらく善意からか断りなく「故旧歓迎母待門」に書き換えている。しかし、すでに石塚は自身の

『わが友野口英世』（昭和二十八年）において当詩を初紹介する際は「奴僕」としてあるのであるから、原書通り「奴僕歡迎母待門」のままでよい。そもそも、結句は陶淵明『歸去來辭』の一節「僮僕歡迎、稚子候門」（僮僕は奴僕と同意）の措辞を明らかに踏まえているのである。この典故について石塚が知らぬはずはないが、一般には理解されないことを危惧して処置したのである。ここは、英世自身の弟（清三）や姉（イヌ）、義兄（善吾）、またその甥（榮や英榮ら）を身内として卑め、「奴僕」と表現しているとすれば何ら問題はない。

母待門…前掲『歸去來辭』の「僮僕は歡迎し、稚子は門に候つ」の句形を用い、石塚詩の結句「母矣且暮倚閭門」を受け、いわゆる「倚門之望」の故事を反覆している。『戰國策』齊策六に「王孫賈年十五、事閔王。王出走、失王之處。其母曰、女朝出而晚來、則吾倚門而望。女暮出而不還、則吾倚閭而望。女今事王、王出走、女不知其處、女尚何歸」とあり、王孫賈の母が主君閔王の失踪に無頓着な息子を誡めた言、「お前が出かけていつて帰らないときは、朝に晩に村里の門に寄りかかって帰りを待ちわびたぞ」に拠る。

【通釈】

この身は孤独な雁のごとく千里も彼方に翻り
行く先々で何ら足跡を残せぬ自らを憐れむばかり
昨晩はつきりと帰郷する夢を見たぞ
兄弟らは歓迎してくれ、母は門口で待つていたよ

以上、高山歯科医学院時代に始まる英世と石塚との厚い友情について振り返り、英世の大正四年秋の凱旋帰国を促した石塚の漢詩附き書翰と同封された母シカ像撮影の顛末、英世の返書とその唱酬詩などに

ついて、考察や解釈をおこなった。

「頭上に天を窺はず、足下に地を踏む能はず、常識を以て律することが困難」で時に「狂人に近かつた」（奥村『野口』）という英世ではあったが、石塚とは初見時より不思議と馬が合った。「稿者補…石塚は」小子の血脇方ニ世話ニなり居る頃同居し候、性質温厚慎重の人に候」（大正四年五月二十一日付）と榮宛書翰に記されており、その温厚でゆかしい人柄が天才肌で剛毅朴訥、「凝り易き熱し易き性質」（明治三十五年三月十三日付血脇宛書翰）で「ヒューマンダイナモ」稿者註…人間発電機」（松平恒雄「満身唯研究あるのみ」）とさへ呼ばれていた英世の張り詰めた情熱を和らげていたのではないか。帰国時の再会についても英世は、「石塚君の高情、小子も感じ入申候」（十二月七日付榮宛）と振り返り、「君とこうした旅を二、三ヶ月も試みたいなあ。石塚君、管鮑の交りというが、君と僕とはそれにも劣らない、こうして水入らずの旅は実に愉快だなあ」（石塚『わが友』）などと石塚の故郷新潟への講演旅行を述懐している。漢詩に少しく造詣のあった松籟こと石塚との交遊が、数少ない湖柳こと英世の詩作をも誘引したとすれば、ささやかでも英世の真情を遺文中に探らんとする後学の徒をして益せしむるものがあつたといえよう。

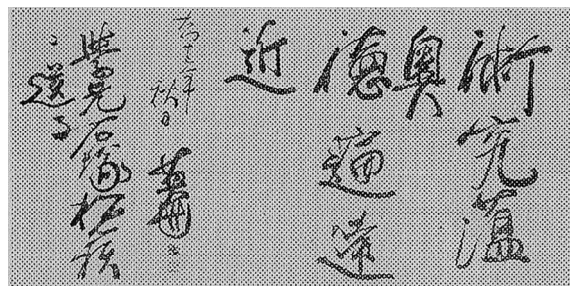
結語

大正四年九月五日午後四時過ぎ、英世が乗る日本郵船横浜丸はようよう埠頭に着岸した。血脇守之助は門下生を多数引き連れ、小林榮、渡部鼎、田原利らとうち揃い、各社の新聞記者に取り囲まれた英世を救い出さんとする態で再会を果たし、涙ながらに固い握手を交わした。横浜停車場からは二頭立ての馬車を駆って東京駅に着くと、すで

進捗し来りしに因る事と存候」(大正四年五月二十二日付)と、幼年期の小林栄、少年期の渡部鼎、青年期の血脇守之助という大恩人の名を順次列挙し感謝の意を表している。英世の事蹟を多少なりとも繕く者には、よく首肯し得るこの三人であろう。確かに、このうちの誰ひとりが欠けても、その後の英世がああ医聖英世たんとすることは決してなかったに相違ない。ましてや北里柴三郎に先立ち、日本銀行券の肖像に長らく収まることなどあり得なかつたのである。

しかしながら、小論で縷々考察してきたように、郷里の竹馬の友を除けば必ずしも同年代の親友が多いとはいえなかつた気難しい英世にとつて、身を立て名を揚げる以前から終始温情を寄せ続けてくれた石塚の存在も、またきわめて大きかつたであろう。二箇月にも互る華々しい滞在を終え帰米したのち、英世は石塚に対しわざわざその恩人「市島春城氏より寄贈の筆墨にて認む」と断つて、「歸省中は久々にあひ且つ多忙にも不拘數回兄と旅行同宿するを得たりしは小生の非常に愉快と今尚想起致し候、(中略)中田の観音参り等を一緒にされし、小生の非常の徳とし深謝する處である」(大正五年三月二十三日付)と礼状を送っているが、なおも書き足りなかつたらしく、珍しくも同日にもう一通したためている。「春暖の頃になれば愚母と小林令閨とが兄の處にたより行くとの筈」と石塚に母シカと栄夫人との義齒製作を依頼しつつ、「シヤケの子の箱詰めは到着せしも臭氣劇烈なる爲め到底家に持歸る譯に不參、遂に投棄致候、處變れば風かわるとかにてアレは矢張日本に限るとあきらめ申候、不惡御笑ひ被下度候」(同)などと、石塚がアメリカの英世夫妻へ贈つた、おそらく新潟長岡産「鮭のスジ子の漬物」(六月二十九日付栄宛書翰)が腐敗して悪臭紛々、やむなく廃棄した旨を正直に書き送っている。冷蔵技術も未発達な時代に、いくら塩蔵とはいえ鮭の腹子を船便で送る石塚もいかがかと思

が、それを珍味の御惠贈に与り幸甚、などと社交辞令に終わらせず、いくぶん諧謔味をもって答えているあたり、兩人の深い交誼のほどが、悪臭に顔をしかめつつ苦笑する英世の姿とともに彷彿として知られるというものである。



大正十二年九月一日、あの関東大震災が日本を襲う。「只今空前の一大天災、新聞にて拜承、實ニ寢耳に水の譬ひ驚愕悲傷の極ニ御座候」(九月三日付栄宛)と英世は急ぎ書翰を發している。同年の春、石塚は赤坂溜池町に念願だった歯科診療所を開設したばかりであった。この間の英世の書翰がほとんど残されていないので、詳細な経緯は審らかにし得ないが、震災の苦難から血脇を陣頭に立ち上がるうとする東京歯科医学専門学校の教員学生を鼓舞するため、英世が「高雅學風徹千古」(高雅の學風、千古に徹す)と記し、わざわざニューヨークから贈っていたことは現存する扁額から判明している。そして、もう一書が石塚の元に残されていた。そこには、「學兄石塚松嶺ニ送る」とし「術究蘊奥、徳遍遠近」(術は蘊奥を究め、徳は遠近に遍し)と大書されている。「日本文字が多少下手になつてゐる」(宮瀬睦夫『野口英世の手紙』)頃のものとはいへ、いかにも歯科医師の興義を究め、「溫良恭儉讓、以て之を得たり」(『論語』學而)を地でゆく盟友石塚三郎にふさわしい、野口英世渾身の揮毫であつたといえるであろう。

附記

この小論においては、帰朝した野口英世が「數回兄と旅行同宿」したうち、石塚にたつて請われた新潟医学専門学校での講演会についてほとんど言及しなかった。この時、岩越線（現磐越西線）の汽車中において詠じたとされる、英世の興味深い七言絶句と石塚の次韻詩の解釈については、その経緯とともに稿をあらためて論じることにした。

註

- (1) 野口英世が差出人、また宛先の書翰については、基本的に『野口英世書簡集I』（野口英世記念会、平成元年）、及び『野口英世書簡集IV』（野口英世記念会、平成十八年）に拠り、橋輝政『野口英世書簡集と母の生涯』（文献協会、昭和六年）や宮瀬陸夫『野口英世の手紙』（愛亜書房、昭和十八年）を適宜参照したが、翻刻にあたって誤読や誤植と判断し従わなかった文字が往々にしてある。小論に引用する際、原文にない読点等は稿者がわたくしに附したもので、変体仮名を除く仮名遣いは原文のままとした。ただし、母シカ直筆書翰の句点については原文通りである。漢字については、原典が書翰という直筆ゆえ、当然ながら俗字を含む新旧字体が混在しているが、小論では一般的な環境において表示し得る範囲内で正字体に統一した。書翰執筆者自身による誤字や方言表記については、そのまま温存して「ママ」と振った。なお、小論中の書名や作品名について、漢詩文、及び戦前のものは本文を含めておおむね正字体とし、人名や社名については、人名（旗野餘太郎）の「餘」字を除き常用字体としたが、引用文中の人名や社名についてはその限りではない。
- (2) 奥村鶴吉『野口英世』（岩波書店、昭和八年）。小論においては、第三刷を底本とし改訂第八刷の訂正と第十二刷の「追録」とを含む『復刻』野口英世（野口英世記念会、昭和五十一年）を使用した。
- (3) 小林栄宛に「色々考ふれば學問ほど造作なきものはなく、世渡りほど六ヶ敷ものは無之候」（明治三十六年九月二十二日付）と記したこともある。
- (4) 『週刊醫界展望』第三十号、医界展望社、昭和十四年。
- (5) 澁澤尚「野口英世の漢詩文―渡米前所詠『七絶』と雅号『湖柳生』とをめぐって―」（『福島大学人間発達文化学類論集』第四十二号、令和七年）

(6) 磐梯山は、福島県耶麻郡猪苗代町、磐梯町、北塩原村にまたがる活火山で、会津盆地側の山容から会津富士とも呼ばれる。明治二十一年七月十五日の水蒸気爆発により小磐梯が大規模な山体崩潰を起こし、これによる川の堰き止めで大小の裏磐梯湖沼群が形成された。英世が三ツ和小学校の尋常科を修了、温習科に入って「生長」を務めていた頃のことである。

(7) 『科学知識』第八巻第七号、科学知識普及会、昭和三年。

(8) 土井晩翠『野口英世頌』（野口英世記念会、昭和十四年）。

(9) 小林栄『野口英世の思出』（岩波書店、昭和十六年）。この書の「はしがき」に、「野口英世博士を其の少年時代に發見して之を教育輔導し父子の契まで結んで生涯その鞭撻者であつた小林栄翁の博士に關する思ひ出話の口述をそのまゝ、沼田史雄君が筆録したもの」とある。

(10) 英世は借金にあたり、「篤い恩誼を感謝すると共に、徒らに恩恵に浴するを甘んずべきものではなくして、後日返済すべき義務あるものと彼は思つたので」（奥村『野口』）、次の一札を書いて渡したという。「證一金參圓也漢文教科書四冊代右前記之金額無據要用に付借用仕候處實正也依而返済の期は明治廿六年舊六月廿五日とし必ず御返済可仕候萬一相滯候節は父母よりの頼み決して不都合致間敷候爲後日之一札如件 明治廿六年舊正月十八日 野口清作」

(11) 英世の生涯に互る不眠不休ぶりを語る逸話や回想には事欠かない。「昔から勉強には晝夜の別を忘れてゐたが、（中略）彼の二十四時間不眠主義は、常人をして寧ろ恐怖を感じしめるものがあつた」（奥村『野口』）という。語学に天賦の才を發揮したことについても同様で、「野口君は中学時代からドイツ語、フランス語を独習し、牛莊の防疫官時代には中国語をやり、マドセン研究所時代にはデンマーク語をやり、黄熱病研究にエクアドルへ行つた時はスペイン語で演説するという勉強ぶり」（志賀潔『野口英世君を偲ぶ』、『或る細菌学者の回想』所収、雪華社、昭和四十一年）で、「その語学の勉強法も極めて解剖的で、たとへばヒドロテラピーといふ字があるとすると、ヒドロとは何のこと、テラピーは何のことといふ風に別けて覚え、つひにはラテンにまで遡つて研究するといふ鹽梅であつたから、一度覚えたら金輪際忘れないのは勿論、その語源を應用して一層ひろく覺えるといふ調子で、實に精力絶倫にして其強記には驚かざるを得なかつた」（藤島太麻男「上京前後の野口博士」、前掲『科学知識』第八巻第七号）という。北里伝染病研究所時代、この語学に堪能なるを買われて来日したフレクスナー博士の通弁に抜擢され、それが渡米後の二人の奇縁を生むのである。在欧米中の英世の諸活躍も、この外国語への即応能力によるところが大き

- いように思われる。
- (12) 『日本医事新報』第一四九号、日本医事新報社、昭和二十七年。
- (13) 渡部敬三「隠れたる私塾『研幾堂』」(『会津会報』創刊百号記念号、会津会、平成六年) 参照。
- (14) 本邦初訳『富國論』は、石川暎作が明治十五年から田口卯吉創刊の『東京經濟雜誌』に掲載し始めたものであるが、明治十九年、第四篇の途中で病没したため嵯峨正作に引き継がれ、明治二十一年に刊行された。
- (15) 『世説新語』言語篇に、「顧悦與簡文同年而髮蚤白。簡文曰、卿何以先白。對曰、蒲柳之姿、望秋而落、松柏之質、凌霜猶茂」とある。
- (16) 『ヒポクラテス集典』やペダニオス・ディオスコリデス『薬物誌』に記載があり定説として巷間に通用しているが、前者については樹種同定に諸説あり、その僅かな記述も婦人科における子宮燻蒸描写に限られるので、柳の薬効の神秘性を医聖に仮託した側面も否定できない。
- (17) 編集委員会編『血腸守之助傳』(東京歯科大学、昭和五十四年)。
- (18) 中原泉・陶栗嫻「歯刷子ロード―楊枝歯刷と植毛歯刷子―」(『日本歯科医史学会誌』第十八卷第三号通卷六十八号、平成四年)、石川堯雄「正法眼蔵の衛生思想―特に口腔衛生について―」(『日本歯科医史学会誌』第六卷第二号通卷二十号、昭和五十三年) 等参照。また、柳樹の薬用の歴史については、福田道男「義経はやなぎの薬効を知っていた―歯扶柳と歯木―」(『医学情報社』平成三十一年、同『補訂版』義経はやなぎの薬効を知っていた―付章・神樹柳の呪術性―) (『医学情報社』令和六年) 参照。なお、福島市新浜町には、義経伝説に由来する「歯扶柳(ようじやなぎ)」という著名な垂柳の巨木が存在していた。その場所は、かつての農林省蚕糸試験場福島支場であり、昭和三十六年以降は福島大学附属小学校の敷地となっていた。「歯扶柳」は校庭にあつてその緑蔭とともに長年愛されていたが、昭和六十年の増築の際に惜しまれつつ伐採されてしまった。現在、株分けしていた苗が大阪大学歯学部内の園庭に移植され相応の樹高に成長している。歯学と楊柳との関係を象徴するようなこの巨樹について、英世が見知っていたか否か審らかにし得ないが、恩師の栄は明治十一年に福島師範学校を卒業しており、ごく近隣にそびえる伝説の「歯扶柳」を実見していた可能性は十分にある。加えて栄は農村振興に尽力し殊の外養蚕業に熱心であったから、「歯扶柳」がそびえる蚕糸試験場にまで足を伸ばしていたとしても不思議ではなからう。
- (19) 森山徳長・亀谷博昭等「野口英世が歯科医学叢談および歯科学報に投稿した論文について」(『日本歯科医史学会誌』第十八卷第三号通卷六十八号、平成四年) 参照。
- (20) 佐藤泰彦「祖父梅次郎の盟友、石塚三郎先生の事跡」(『日本歯科医史学会誌』第二十四卷第一号通卷九十号、平成十三年) 参照。ちなみに、石塚の娘恒子は実業家堤康次郎の内縁の妻として、のちの西武グループ総帥である堤義明を生んでいるので、石塚はその祖父にあたる。石塚と堤康次郎は衆議院議員初当選の際の同期であった。
- (21) 吉田東伍とその周辺については、千田稔『地名の巨人 吉田東伍』(角川書店、平成十五年)、吉田冬蔵『吉田東伍の特質』(阿賀野市立吉田東伍記念博物館叢書、平成三十一年) 等を参照。
- (22) 『列子』湯問篇にみえるいわゆる「斷琴之交」の故事。伯牙の琴音による描写に鍾子期が「善哉、峨峨兮若泰山、善哉、洋洋兮若江河」と見事に呼応し、「知音」たるを示した。「峨洋」の語は、例えば頼山陽詩に「相遇峨洋樂意深、阿兄能畫弟能琴」とあり、息子三樹三郎の次韻詩にも「立談休道交情淺、亦似峨洋千古心」とある。
- (23) 高橋源一郎編『吉田東伍博士追懷録』(私家版、大正八年)。小論においては、阿賀野市立吉田東伍記念博物館叢書『復刻版』吉田東伍博士追懷録』(平成二十九年) を使用した。
- (24) 吉田東伍の長兄旗野餘太郎の妻と市島謙吉の妻とは姉妹であるので、両人は姻戚関係にもあつた。
- (25) 歯科医術開業試験の合格番号は、榊原悠紀田郎『歯記列伝』(クインテッセンス出版、平成九年) に拠る。
- (26) 吉田東伍『松雲詩草』(私家版、大正二年、復刻版、吉田東伍記念博物館叢書ブックレット、平成九年)。池澤一郎「漢詩人吉田東伍―『國朝詩綜』と『松雲詩草』―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六十三輯、平成三十年)、田春娟「漢詩人としての吉田東伍―漢詩人阪口五峰との関わり―」(『新潟県文人研究』第二十一号、平成三十年)、藤富史花「五峰坂口仁一郎と震卿吉田東伍の交流―五峰『贈吉田震卿』詩を中心に―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六十九輯、令和六年) 等参照。ちなみに、坂口仁一郎は、坂口安吾の実父である。
- (27) 佐藤泰彦・佐藤礼「松籟・石塚三郎先生遺稿の漢詩」(『日本歯科医史学会誌』第二十六卷第四号通卷百二号、平成十八年) 参照。
- (28) 血脇守之助の生誕地である千葉県我孫子市の手賀沼公園内には、その功績を讃え池田成彬題額、木下謙次郎撰による「血脇先生謝恩之碑」が建立されている。
- (29) 渡辺史生「石塚三郎旧蔵ガラス乾板について」(『よみがえる日本の近代 石

塚三郎旧蔵明治・大正ガラス乾板写真」所収、ニコソ・ニッコールクラブ、平成十一年）参照。

(30) 前掲『よみがえる日本の近代 石塚三郎旧蔵明治・大正ガラス乾板写真』所収。当該書は、石塚旧蔵の多岐にわたる硝子乾板約二千二百枚から精選された写真集である。当然ながら、石塚本人の撮影にかかっているものが大半を占めると思われる。

(31) 盛唐以前の用例は見出せず、中唐の司空曙『送僧無言歸山』詩に「龕泉朝請盥、松籟夜和禪」、晚唐の歐陽衰『南澗寺』詩に「松籟冷冷疑梵唄、柳煙歷歷見招提」などと教例みえる。

(32) 石塚三郎『わが友野口英世』（社会教育協会、昭和二十八年）。

(33) 『日本醫事週報』第一六九六号、日本医事週報社、昭和三年。

(34) 『日本医事新報』第一二四八号、日本医事新報社、昭和二十三年。

(35) この「野々口精作」問題がまったくの偶然であったことは、英世の殉職後、小林栄から坪内逍遙への直接の問い合わせによって明らかとなっている。

栄からの「明治三十年の頃順天堂病院にて一醫學生たりし當時の野口清作は御著書當世書生氣質なる本を読み主人公たり野々口精作なる醫學生ありて恰かも野口清作を呪ふが如き有様を視て深く驚嘆仕り候、私も之に同情して英世と改名任せ世界の醫界に英雄たれと深く訓戒仕候處、本人も大いに嘖起、遂に野口英世博士と相成申候、右は偶然の御作にて候哉、今以て不思議に奉存候、思ふに御著の野々口精作は野口清作の奮勵に有力なる一原動力を賜はり候と奉存候、當時の御貴志御垂示被成下度御願申上候」（昭和五年五月十一日付）に対し、逍遙は早々に「故野口博士に關する御追懷談は洵に耳新しく深く感興を以て拜讀いたし候、彼の拙作は明治十七年起稿十八年出版のいたずらが甚だしき架空談、人物の姓名等は大方出たために候、あの頃故博士は多分九歳か十歳にておはし候けむ、姓名の類似は申す迄もなく偶然に候」とし、「さるにても世に珍らしき御物がたり、若し御さしつかへなくば御仰せ越しのままに故博士の小傳をも加へて拙文に綴り、例へばキングの如き誌上に公けにせば今一世に瀾漫する情氣蕩氣を多少廻らすに足べきかと考へ候」（五月十六日付）などと返答している。

(36) この七絶について、『野口英世書簡集Ⅳ』では「荷筆」を「荷筆」に、「客衣」を「容衣」に翻刻しているが、それでは意味をなさない。何れも草書体の近似による誤読であろう。さらに、「筆」は入声の仄声、「容」は平声であるから、仄起式にも合致しなくなる。

(37) この渡米前の七言詩については、前掲拙稿「野口英世の漢詩文―渡米前所詠『七絶』と雅号『湖柳生』とをめぐって―」において詳解している。な

お、詩中の「捉」字を『野口英世書簡集と母の生涯』では「捉」に、『野口英世書簡集Ⅰ』では「視」に作っており、前者は「容」字を「客」に作っている。

(38) これについて、原圭介「野口英世 帰国美談に新説」（『産経新聞』、平成二十一年六月二十五日付）は、渡辺史生（当時吉田東伍記念博物館館長）の「石塚の手紙と写真が届く前に、野口が帰国を決心した可能性が高い」、「手紙と写真だけで帰国を決めたとは考えにくい。『わが友野口英世』に紹介されている野口の言葉は、世話になった石塚に対する儀礼的答礼だったので」という書翰を読解した「新説」を紹介している。このことは書翰の一句「若し都合よければ今秋二寸歸省するやも知れず候」（大正四年七月四日付）を読めば容易に知られることであるが、恩賜賞授与式（七月五日）でさえ「旅費甚だ遠く小生目下の境遇之を許さず候」（五月二十二日付）といつて帰国せず血脇を代理に立たせた英世であるので、以前からその思いは一定程度醸成していたとはいえ、やはり帰朝実行への一大契機が石塚撮影のやつれたシカ像にあったことは間違いないであろう。英世は、しばしば「來年の六月中には必ず歸省仕べく候」（明治四十五年二月二十二日付宛宛）などと記しており、帰省への示唆は前掲「新説」の指摘に始まったことではない。

(39) 星一は、磐前県菊多郡江栗村（現福島県いわき市錦町）出身の実業家、政治家。星製菓の創業者であり、社内に設置した教育部は星製菓講習会へと発展、星製菓商業学校、星製菓専門学校を経て星製菓大学となった。ちなみに、長男は作家の星新一である。

(40) 丹実「野口英世 その生涯と業績」（講談社、昭和五十二年）は、『第1巻〈伝記〉』『第2巻〈書簡〉』『第3巻〈業績〉』『第4巻〈回想〉』からなる浩瀚な資料集として有用である。

(41) 後年、石塚三郎は「野口英世―箕面公園の銅像建設に因みて―」（『読書春秋』第六卷第八号、昭和三十年）において当該詩を紹介しているが、そこでは「母兮」に修正している。

(42) 前掲「野口英世―箕面公園の銅像建設に因みて―」は、昭和三十年、英世の銅像が、帰国時に母シカと訪れた箕面の料亭「琴の家」附近に建設された際に寄稿されたもので、文中に唱酬詩全篇が掲載されている。なお、銅像建設の顛末については、森下薫「箕面『琴の家』の野口博士と南川光枝さん」（『日本医事新報』第二一三二号、昭和四十年）参照。

(43) 『醫事公論』第八三三三号、昭和三年。

* 小論における図版類は、財団法人野口英世記念会編『フォトドキュメンタリー・人類のために 野口英世』（野口英世記念館、平成八年）、『写真でつづる野口英世の恩師 教育・地方振興の功労者 小林栄』（野口英世記念会、令和二年）、及び前掲『血脇守之助傳』、奥村鶴吉『野口英世』、丹実『野口英世 第2

卷〈書簡〉に拠る。

（福島大学人間発達文化学類教授）